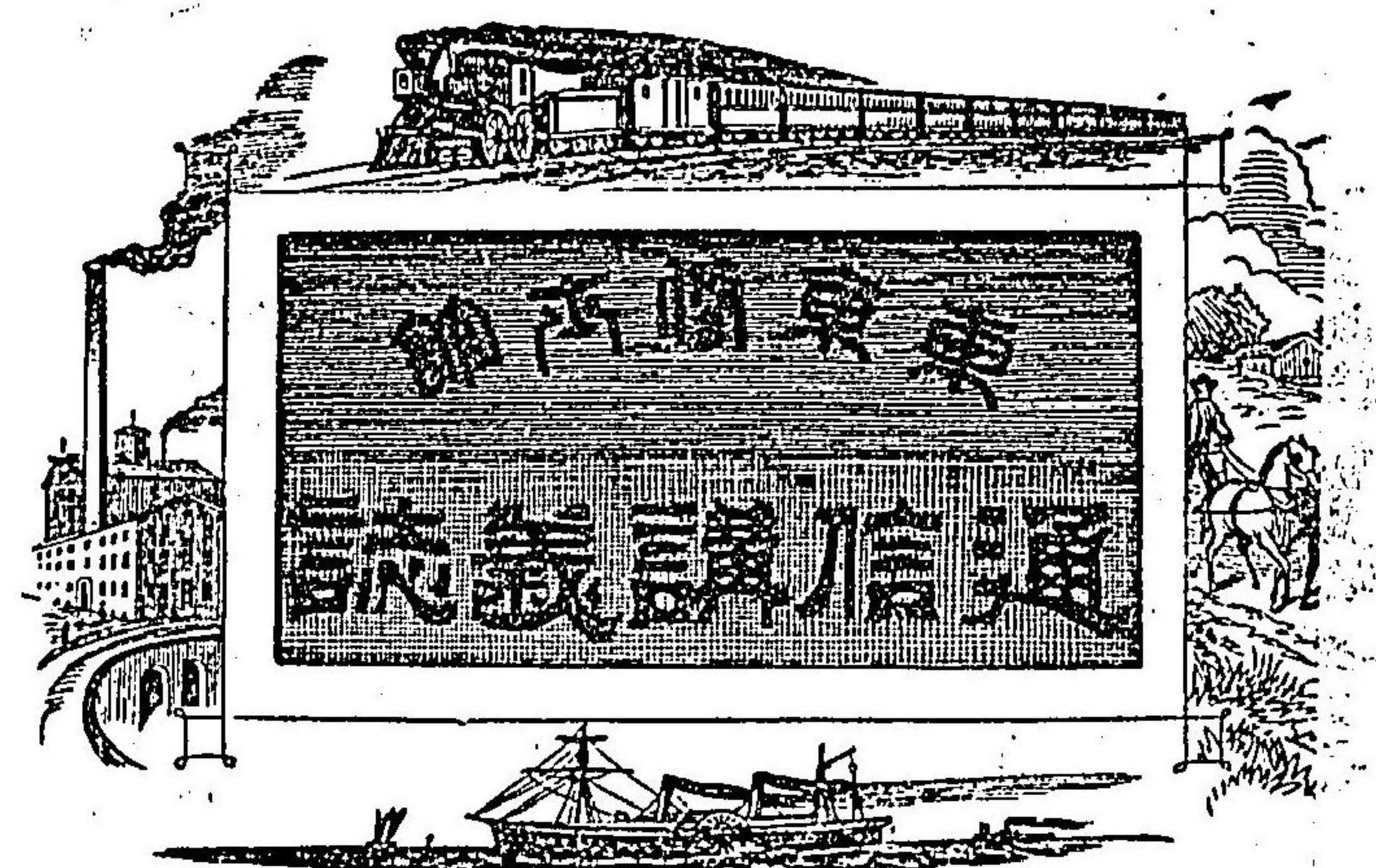


20
3

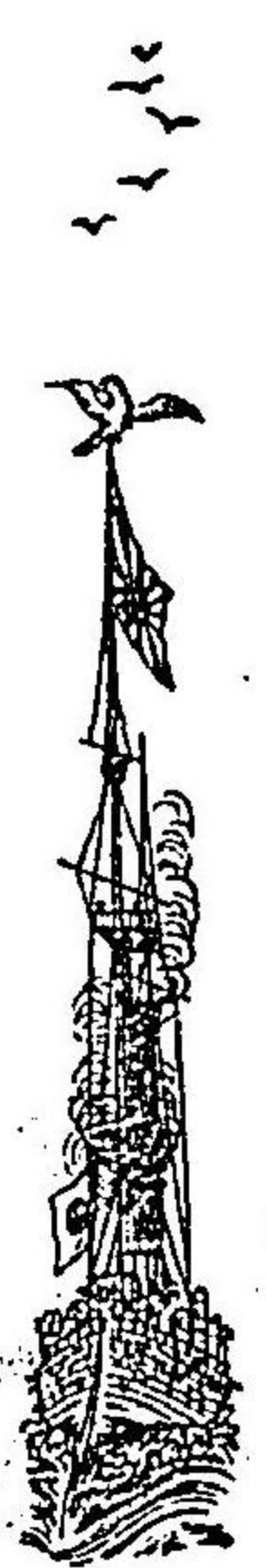


249

阪東直次氏

産婆全科 第一回

●本講は直接に話しをまゐると
同じ事に講義したるものです
からして如何なる人にでも分
ります



産婆學

総論



生殖と云ふことは凡ての動物が自然に具へて居るところは天性であるから婦人が孕む
 べから産室を離るゝまでの間、多少身体に異變を起すとか或は苦痛を感ずると云ふ
 のも生理上自然に起るとするの作用で疾病かと云へば疾病のやうでもあるが疾病でな
 いと云へばまた疾病でもないのである夫れだから妊娠分娩産褥に於ける状態にも自
 ら一定の法則のあるものであるが併し天に風雨電雷の變動があると同様に其の経過中
 にも又種々の異狀を起すことがあるものである産婆學は則ちその総ての経過に於ける
 常態と變態とを研究し兼ねて妊婦、産婦、産婦及び産兒に對して施すべき保護の術を致
 するところがその學問としての産婆學によつて學び得たるどころの智識を以て妊婦乃至産兒
 を保護するのは則ち産婆たるもの、職務である

右に述べたるが如く産婆は婦人に特有するところの自然の作用(即ち生殖的作用)を封
 助すべき役目を有つて居るのであるから荷し得る産婆たるものは依頼者の貧富如何

関はらず速かに其の招きに應じて懇切丁寧に保護を與へねばならぬとは勿論であるが
 元來産婆は看護人同様のものであるから若し其の経過に異常を起したとか或は不良
 の分娩に臨むだ時より直ちに醫師を迎へて其の診察を乞はねばならぬもので而して斯
 かる場合に産婆は始終醫師の命令に従つて充分に力を盡くさねばならぬものである
 産婆は産婦の経過中に異常を起した時には直ちに醫師を診察を乞へねばならぬもの
 であるから産婆の尤も心得て居らねばならぬのは最初産婦の依頼に應じた時に先づ其
 の婦人の身体を精密に検査して其の異常の有無を診定すべきことである而して其經
 過の平常なるものに對しても尙ほ産婆本分の取扱ひをなし且つ其の養生法杯をも懇切
 に言へ聞かして十分の保護を與へねばならぬ妊婦及び産婦は其の経過中に養生法を誤
 まつたり或は産婆の取扱ひ方よろしくないために母体において後日難治の病症を引
 き起したり甚だしきものは胎兒の生命を害ふたりまた産婦をも危くすることがあるも
 のであるから産婆たるものは餘程職務に大事を取らねばならぬもので而て一朝この變
 症を引起した時には其害毒は實に極りないものである殊に分娩時においては其の害を

特 52
 11

及ぼすとの速かて且つ大なることはまことに恐るべきものであるが併し其の未だ甚だ
 しくならぬ前において相當の醫療を施したならば決して母兒を害せずして容易に救ふ
 とが出来ゝるものである然るに産婆にして其の診察の疎漏なるがために更に其の異常に
 氣付かずして漸く危きに迫つて始めて之れを醫師に訴ぐるが如き過ちを引起すものが
 あるがこれらは其の職務を盡さぬものゝ而も尤も甚だしきものと云へねばならぬ母兒
 の己に危きに迫つてからはよし幸にして之れを救ひ得る丈けの手段があるよもせよ必
 ず多少の害は免がれぬものである許りてなくそれがため遂に救ひ得ることの出来ぬこ
 とは世間に往々例しのあることであるから母兒の危きを未發に救ふのとまた危きに陥
 らしむるのは獨り産婆が其の職務を盡すと盡さぬとにあるものである
 要するに産婆の職務と云ふものは平常の妊娠及び分娩の場合において相應の取扱ひを
 なさねばならぬものにはあるが少くも異常を認められた時には直ちに醫師(殊に産科醫)
 を招いて其の處置を乞ふべきもので決して自らが變症を取扱ふべきものではない
 以上述べ來つた通り産婆の職務は至つて大切なるもので其責任は至つて重なるものであ

而して若し産婆にして其の業を修めず其の職を勵まらずして不學怠慢であつたならば
 此がために言ふべからざる悲惨を演せしめねばならぬものであるから産婆たるもの
 互しく其の業を修め其の職を勵むて彼等母兒の安全を圖らねばならぬ本篇は則ち世
 産婆たらんとするものに必要欠くべからざるところの

○人体の概略、婦人の骨盤、婦人の生殖器

○妊娠、分娩、産褥の経過に於ける平常と異常の状態並びに其の取扱ひ方及び手術

○嬰兒に發すべき疾病の大意

を尤も簡略に解り易く説明したものである

第二編 豫備論

第一章 人体の概略

体を概して硬部と流動物とより構成せられてあるものである而して其の硬部と云ふ
 則ち骨のことと軟部と云ふは則ち皮膚、筋、靱帶、尿管、神經、内臓、等のことであるを
 流動物と云ふのはおもに血液と淋巴液のことを云つたものである

骨は相聯結して人体の基礎をなして居るもので其の數は三百十三枚(齒牙を除いて)
 あるものである而して此の三百十三枚の骨の相聯結して完全なる体形をなして居る
 ものを骨格と名付ける軟部へ則ち此の骨に附着して腔を作つて其の内に貴重なるど
 ころの内臓を容れて之れを保護して居るものである

皮膚は全身の外面を被包して居るもので毛爪は則ち其の附屬物であるまた皮膚の下
 には俗に「あぶらみ」と稱するところの脂肪組織と云ふものがある此の脂肪組織は其
 の場所によつて甚だ多くあるところとまた至つて少ないところとあるものである
 筋は俗に「肉」と稱して脂肪組織の下にあるもので其の色は赤い而して其の兩端には
 腱と云ふものを具へられてある此の腱は纖維結締組織から構成せられてあるもので
 白色の光澤のあるものであるが筋は此の腱によつて骨より骨へ附着して而して其の
 運動を主とするものである

靱帶は關節の部にあつて骨と骨とが相互離れぬやうに其の聯結を主として居るもの
 でまた白色の纖維から成り立てられてあるものである

脈管と云ふは血管と淋巴管のことで血液と淋巴液を流通せしむるところの管である而して此の血管には動脈管、靜脈管の二種あるもので動脈管と云ふのは新鮮紅色なる血液を心臓から全身へ輸送するところの管であるまた靜脈管と云ふのは全身の細胞が動脈管の運んだところの新鮮なる血液から營養分を吸へ取つて其の老廢物となつたところの暗赤色の血液を排泄するものであるが靜脈管は則ち此の老廢暗赤色の血液を受取つて心臓へ輸入するものである而して全身中で毛と爪を除くの外は此血管の分布せられぬところは亦いものゝ其分布せられてあるところの状態は恰ど樹の幹から多くの枝の岐れて居るやうに多くの分枝に岐れて其末梢は毛細管と稱する至極么微なる罅狀に終るものである全身の細胞は則ちこの毛細管によつて血液を攝取、排泄するものである

神経は白色の纖維質から成り立てられてあるもので腦髓から出て恰ど尿管のやうに樹枝狀をなして全身へ分布せられてあるものである而して此の神経は身体の運動機能と知覺機能とを主として居るもので人間が痛いとか痒いとか或は熱いとか冷たいとか云ふことを感じたりまた物を見たり音を聞いたり嗅いたり味ふたりすることの出来るのはみなこの神経を具へられてあるからである

内臓と云ふは則ち腦髓、脊髓、心臓、肺臓、肝臓、腎臓、脾臓、胃、腸、膀胱、卵巣、喇叭管、子宮、腔、膀胱及び五管器の総稱である

血液は絶えず全身を循環して居るもので身体の細胞に其の營養分を供するところの尤も貴重なる赤色の液汁であるまた淋巴液は無色透明の液体で人体の諸機關から湧き出て淋巴管に集まつて遂に血液に混じるものであるまた彼の消化を受けたところの飲食物から生ずる乳糜と稱するものも此の血液の部類に入るべきものである

以上述べ來つた外に人体には尙ほ軟骨腺など稱するものがある而して此の軟骨と稱するものは骨よりも軟かで肉よりも硬いところの白色のもので謂所骨の原物である換言すれば骨の幼稚なるもので骨は元來軟骨の變化したものに外ならぬのである而して全身中で生涯骨に變化せずして軟骨の儘であるものは耳朶、鼻翼、氣管、關節等計りである

腺は人体の諸部に散在せるもので種々の液汁を製造するところである則ち涙腺から涙を分泌する唾腺から唾液を分泌する乳線から乳液を分泌する汗腺から汗を分泌するのである

人間の身体は之れを大別すると頭首、軀幹、四肢の三部となるもので皆な前に述べ置いたところの硬部、軟部、流動物の三つから成り立てられてあるものである
頭骨は第一項椎と蝶番關節を成して居るもので全骨格の尤も上位を占めて居るものである則ち頭蓋顔面の二部に區別せられてある

頭蓋は六枚の骨から成り立てられてあるものでこの六枚の骨が鋸齒狀に縫合して卵圓形の骨腔を成して居る此の骨腔を頭蓋腔と稱する則ち腦髓の位して居るところである頭蓋は其の頂上を顛頂と名付け後部を後頭と前部を前額と名付けられて耳前上方を顛額部と名付けられてある大人の頭蓋は其の縫合が至つて堅固で少しも動かぬものであるが嬰兒においては尙ほ緩かであるから多少動くものである
顔面は十四枚の骨から成り立てられてあるもので顛額の關節を除くの外は皆な固

く聯絡して少しも動かぬものである而して其の各要部の名稱を擧ぐれば眼部、鼻部、頰部、上顎部、下顎部、唇部、口部、頤部等である耳は則ち顔面との境ひに位せるものである

軀幹は頸部、胸部、腹部、骨盤の諸部から成り立つてあるものである而して此の軀幹は人体の基本を成して居るもので内部には生活保續の樞機たるどころの貴重な物質交換及び生殖の諸器を包藏してまた頭首、四肢の附着部となつて而して其の運動の機轉を裨補して居るものである併し此の軀幹の基礎となるべきものハ骨椎であつて上部は胸廓、下部は骨盤の諸骨は皆な共に此骨椎によつて其位置を保つて居るものである

脊椎は人身軀幹の柱となつて居るもので宇宙の動物を有脊動物、無脊動物の二種に大別するが如きは皆なこの脊椎を以て標準としたるものである脊椎は后頭骨の大圓孔に始まつて軀幹の下端に達するところの二十六個の輪狀の短骨であつて此の輪狀の短骨が交々疊積して一大骨柱を成して居るのである此の脊椎は内に一條

の長管を有して上方の頭蓋腔に通して脳と連続するところの脊椎を容れられてある而して其の最上の七枚の脊椎骨を項椎（又頸椎とも云ふ）と名付けられてあるまた次の十二枚を背椎（又胸椎とも云ふ）と名付けられて下の五枚を腰椎（又腹椎とも云ふ）と名付けられてるので其の次は薦骨と尾骶骨である

胸椎には左右共に十二枚宛の肋骨が联接して而して運動をなし得るところの關節を作られてあるまた肋骨の前端は軟骨によつて胸骨と聯結して胸廓を構成して内は大なる腔をなして居る之れを胸腔と名付ける此の胸腔内には上方の左右に肺臓が容られてあつて両肺の間に心臓がある肺臓は則ち呼吸を營み心臓は則ち其の縮張によつて血液の循環を主として居るものである肺の後方には食道の中部があつて胸廓の上部左右には左右の鎖骨と肩胛骨とがある而して肩胛骨の四肢が聯結してあるまた薦骨には其両側に髌骨があつて下端に尾骶骨がある所謂骨盤は則ち此等の骨の相結合したもの、總稱であるまた髌骨の下方に髌臼と名付けらるゝ圓い凹むだところがあるこれは則ち下肢の聯結して居るところである

頸は前部を咽喉と名付けられて其の最上部に舌骨がある舌骨の下に喉頭がある則ち音聲を發するところである其の次に氣管があつて氣管の後方は食道の上部があるまた頸の後方を項部と名付けられて項部の最上部に凹むだところがある之れを項窩と名付けるまた頸の両側に大なる動脈と静脈がある所謂頸動脈、頸静脈なるものは則ち之とである

胸廓の前部を胸部を名付ける其の後方は背で胸部の中央の平坦なるところを胸骨部と名付ける其の左右に乳房があつて上臍の下方に凹むだところがある之れを腋窩と名付ける腋窩の上方は肩胛部で下は胸脇部である而して脊椎の上部の左右に三角形の骨がある之れを肩胛骨と名付ける

腹の前上部三角形のところ即ち胸骨の下端の下方を之れを心下と名付けられて其の両側に季肋部があるまた臍の周圍を臍部と名付けられて其の下方を小腹部と名付けられる小腹部は左右で腹の下端に方たるところを鼠蹊部と名付けるまた季肋骨の下方と腸骨櫛の間にある軟かなるところは側腹部で側腹部の後ろに腰部で腰

椎は則ちこの正中中部にあるのである

腹壁は主として筋肉から成り立てられてあるもので内は大腔を成して居る之れを腹腔と名附ける腹腔の上方に横隔膜と名附けるものがあつて胸腔との區畫を成して居る肝臓は腹部のト右端の季肋骨の後方に在つて脾臓は左方の同部にある胃は心下にあつて膈は其の後ろにある腰椎の両側には腎臓があつて膈は其の他の腹腔の余地を占めて居る而してこれら腹腔内の臟腑は皆を腹膜と稱するところの薄い皮膜を以て包まれてあるものである

骨盤は其の前側を耻部と名付けられて其の後方の股の間には肛門部がある肛門と外陰部との間は會陰で骨盤の兩側を腸骨部と名付けるまた骨盤の後側の正中中部を薦骨と名付けられて薦骨の左右には臀部が在る此の臀部は至て筋肉に富むで居るところである

四肢の軀幹に联接して許多の筋肉に富むで居る運動自在なるもので之れを上肢と下肢との二部に分けられてある

上肢は肩胛關節によつて肩胛に联接せられてあつて上膊、前膊、手の三部に分けられてある上膊と前膊との間にある關節は之れを肘關節と名付けられて前膊と手との間にある關節は之れを腕關節と名付ける而して上膊は上膊骨と稱する一長骨から成立つてあるが前膊は尺骨、橈骨と稱する二長骨から成り立てられてあるまた手は多くの小骨から成り立てられてあつて更に腕と五指とに區別せられてある腕の内面を手掌と名付けられて外面を手背と名付ける而して五指は則ち拇指、示指、中指、環指、小指である

下肢は上腿、下腿及び足の三部から成り立てられてあつて其上腿は恰と上膊に於けるが如くに大腿骨と稱する一長骨から成り立つて居る其の上端は骨盤と联接して關節を成して居る之れを股關節と名ける其の下端は脛骨と關節して居る之れを膝關節と名ける膝關節の前側に膝蓋骨がある膝蓋骨の其の形は凹いもので移動すべき性質を有して居るものである其の後方(則ち膝關節の後側)に一の凹むだところがある膝圍を名けるまた下腿は前膊に比すべきもので脛骨、腓骨の二長骨か

ら成立てられてあつて其の上端は則ち膝關節を成して下端は足關節に联接して居る下腿の前側を前脛と名付けて其後側の肥豊せるところを腓と名けるまた足關節の左右に突起がある之を踝狀突起と名ける而して足もまた手に於けるが如くに多くの骨から成り立てられてあつて足跗と足趾との二部に區別せらるゝものである足跗の後側は踵部と名けられて下面は足蹠、上面は足背と名けられてある而して足の上端は足關節によつて下腿の下端に联接せらるゝものである

人間は其の生活を保ふして居るの食物から營養分を攝取して其の營養分を全身へ配送して居るからである而して身体の諸器關は此の營養分によつて斷へず其の實質を新たにして居るもので此の機能を新陳代謝と名けられてある則ち陳い廢物を謝して体外に出だし新しい營養物を入れて之を代へると云ふ意味である

人間は此の新陳代謝を營むために其の營養分となるべき食物を取るには一定の順序のあるもので則ち先づ食物を口中において細かゝ咀嚼して尋て其の咀嚼されたる食物が咽頭から食道を通過して胃へ入つてこゝで胃液と混じりて粥のやうのものに變じ

て夫れから小腸へ入つて茲でまた肋臟から分泌するところの胆汁と脾から分泌するところの液汁を腸から分泌するところの腸液とで混和して大腸へ下だるものであるか此の間に既に消化を受けて乳のやうな液に變したるものを乳糜と稱するこの乳糜こそは實に人間に於いて尤も必要なる營養物で胃、腸の壁に分佈されてあるところの淋巴管と血管とに吸収されるものである而して到底消化せらるゝことの出來ぬものは糞尿となつて直腸から体外へ排泄せらるゝものであるまた乳糜よして淋巴管よ吸収せられたものも遂に血管内へ入つて暗赤色の靜脈血に混じてこれと共に心臓の右室へ入るもので而して茲に於いて其の収縮によりて更に大なる脈管を経て肺に射入せらるゝものである

心臓の右室から出て肺に入るところの一大脈管は肺中において恰ど樹の枝のやうに漸々多くの小枝に岐かれて遂に毛細管と稱する至つて細微なる管となつて全肺に分佈せらるゝもので血液がこの毛細管において既に廢物となつたところの炭酸水蒸氣等を肺内から空氣中に吐き出して其の代りに空氣から營養に必要な酸素を吸ひ取つ

て老廢したところの不潔なる血液を新鮮紅色なるものに變化せしむるのである而してこの空氣は肺の縮脹によりて鼻孔、口腔、喉頭、氣管を経て肺に出入するものである

肺中において新鮮紅色に變化したところの血液は恰ど無數の木の根が集つて一根の幹とあるが如き状態をなして居るところの尿管を通過して肺を出で心臓は左室に入つて而してまた心臓の収縮によつて更に大動脈へ出で全身の動脈管を通過して遂に其の毛細管へ分流するものである彼の脈搏は則ち心臓から血液を射出するところの響であるこの脈搏の數は大人にあつては一分時間に七十内外のものである

動脈を通過するところの血液は全身到るところの毛細管において其の部の諸機關に營養分を與へると諸機關からはまた己に暗赤色に變じたところの老廢物を靜脈へ排泄してそれが太なる尿管において乳糜と混じて再び心臓の右室へ還つて肺に入つて茲で更に新鮮なる血液に變つてまゝ心臓の左室へ入つて動脈を経て全身へ配送する斯くの如く血液の始終往還するところの状態を名付けて血液循環と稱する而してま

た口腔、食道、胃、腹を總稱して消化器と名け心臓及び血行器と鼻、喉頭、氣管、肺を呼吸器と稱するものである

血液は以上述べたるところの營養分の外尙は腺の作用によつて種々の液汁に變化するものである而して此の液汁には体中において必要欠くべからざる用をなすものとまた体中にあつては害となるべきものとある則ち彼の唾液、胃液、胆汁、腺液、腸液、涙液、粘液等は其必要なる部類に屬すべきもので尿及汗の如きものは一種の老廢物の變化したもの、体外へ排泄せらるゝのであるから則ち害となるべきものであるまた腎臟、輸尿管、膀胱及び尿道を總稱して泌尿器と云ふのは則ち尿が腎臟から生じて輸尿管を通過して膀胱に溜つて遂に尿道から体外へ排泄せらるゝからである

第二章 婦人の骨盤

骨盤は軀幹の最下部に位して起坐共に軀幹頭首の臺となるものである而して後壁は薦骨と尾骶骨とより前壁と側壁とは無名骨(一名龍骨)より成り立てられてある而して内に一大腔を有して居る之れを骨盤腔と名付ける上下の二部に分けられてあつて而して

其の上部は大きく下部は小さいから上部を大骨盤下部を小骨盤と名付けられてある

女子の骨盤は男子の骨盤に比べては管に其の内腔諸徑の廣大なる計りでなく其の周圍の骨質が甚だ薄く且つ輕い而して其の高さは却つて男子の骨盤よりは低い男子の骨盤は其の前後徑は横徑よりも遙かに大きくして略ぼ卵圓形をかして居るが女子の骨盤は前、後徑と横徑の差が左程甚だしくないから其の形は殆んど圓環に類して居るのである

骨盤は女子生殖器の要部たることの卵巢、輸卵管、子宮、膣等を保護し且つ其の位置を維持する用をなして居る計りでなく分娩の機轉に就いて最大の關係を有して居るものであるから其の形状の大小において甚だしい異常の有るもの例令其胎兒及び陣痛に少しの變狀があつても必ず分娩の機轉に著しい障礙を來たすものである要するに異常の骨盤を有して居る婦人は平常の分娩をかし難いものである

薦骨は上部は腰椎と連なつて下部は尾骶骨に側縁は髓骨に接して居るところの背椎

の一部である則ち骨盤の後壁をなして居る骨で其の形は不正なる三角形をなして上端は廣く下端は尖つて而して前面へ彎曲して平滑で後面は凸隆して多くの突起があつて此の両面に其の中縁の左右に四對の孔があるまた側縁の上部に耳狀の面があつて其の上端の第五腰椎に接して前方に突出して居るところを薦骨脚と稱へる薦骨は元と五枚の椎骨があるそれが年を経るに隨つて漸々軟骨硬化して一骨に變じたのであるから小兒の時分にこの五枚の椎骨の軟骨に由つて互に聯結して居るのは甚だ明瞭である而して既に癒合して一骨に變じた後でも尙ほ其の前面に四條の低い横線を遺されてあるまた其の前面に四對の孔があつてこの孔から神經を通じて居るのである

尾骶骨はこれもまた其の形は三角で四枚の椎骨から成り立てられてあるが併し薦骨のやうに癒合しては居らぬ而して其の上端は廢くして薦骨と接して下端は尖つて前方に向つて居るまた其の薦骨との接合は緩かであるから之れを前方から壓すと稍や後方へ退くもので骨盤の下口は分娩の際に少し擴張し得るやうに造られてあるも

のである

髌骨は左右相對して骨盤の兩側壁と前壁とをちして後ろは薦骨の耳狀面に接して居る而して左右のこの骨が相互聯接して所謂耻骨縫際をなして居る此骨は元來腸骨、耻骨、坐骨の三枚の骨から成り立てられたもので小兒の時分にはこの三枚の骨がまた分かれて居るが漸々癒合して遂に一個に變ずるものである而して其の癒合部則ち此の骨の外側に圓き深窩がある之を髌臼と稱する上腿骨と關節するところは則ちこの髌臼である

腸骨は髌臼の上方に在つて體と板との二部から成立てられてある而して其の体と云ふのは下の厚い部分で板と云ふのは上の扁平なる部分のことであるこの板の上縁を腸骨楯と稱して楯の前端の突出した處を腸骨の前上棘と稱する而して其の後端は則ち後上棘であるまた内面において体と板との界ひに彎曲の隆起線がある之れを無名線とも内弓狀線とも稱するまた中央の凹むだ部分を腸骨窩と稱して後部の粗糙にして膨大なる部分を腸骨結節と稱する無名線の後端に耳狀面がある即ち

薦骨の耳狀面と相接するところである

坐骨は骨盤の下部を形成して居るもので一体と二枝とより成り立てられある其の稍や厚強なる部分の体は髌臼三分の一下部を成して居る体の前縁は耻枝の地平枝に接して其上縁は腸骨して居る其の稍や薄弱にして前上方に走れる部分を上行枝と稱する則ち耻骨の下行枝と連合して居るものであるまた其の後方にあるもの下行枝で下行枝の後縁に在るところの尖つた突起を坐骨棘と稱するまた下部の粗糙膨大なるものを坐骨結節と名付ける

耻骨は髌臼の前方に在つて骨盤内部を成して居るものであるこれもまた一体と二枝とより成立てられてあるもので体の中線において左右相接して而して骨盤の前壁をなして居る其の左右相接合して居るところを耻骨縫際と稱するこの縫際から起つて後外に退くものは則ち地平枝で其上縁に鋭い線があるこれを耻骨楯と稱する則ち腸骨の無名線と連絡して居るものであるまた縫際の下部から出て下外方に下たるものは下行枝で坐骨の上行枝と聯結して耻弓を作るものである而して耻

の上隅は耻弓項と稱するものである

以上述べたところの諸骨は四ヶ所において互に相联接して骨盤と名付けらるゝ一條の骨管を成してをるもので其の四ヶ所の联接と云ふのは則ち前にも述べた通り耻骨縫際よおいて一個薦膜縫際において左右二個薦骨と尾骨において一個を以て四個所になるのである而して此の四個所の联接中薦骨と尾骨との联接を除いた外は皆な軟骨とか或は靱帯を以て固く結び合つて少しも運動せぬのである殊に薦骨縫際の邊には坐骨薦骨靱帯と稱する一條の強い靱帯があつて一層其れ联接を堅固にしてあるがこの坐骨薦骨靱帯は坐骨棘と坑骨結節とから起つて薦骨の側縁に附着してをるものである

前にも少しく述べて置いた通り骨盤は其の上半分に至つて大きくして下半分はまた甚だ小さい其の上半分と云ふのは則ち薦骨脚から腸骨の無名線を通つて耻骨楯に齧かれてある一輪の線以上のことで下半分と云ふのは則ち其の線より以下のことである骨盤の上半分則ち大骨盤は腸骨(左右)の上部、薦骨の根基(第五腰椎体)から構成せられてあるもので其の左右側のみ全骨壁を成して後壁は僅かに一部分のみで前壁の如き

は其の形は漏斗状をなしてをるとはいふものゝ全く無いやうなものである生体においては腹筋が其の壁を成してをる斯やうに其の骨盤が不完全であるから一に之れを假骨盤とも名付けられてある

大骨盤は分娩に就いては差したる大關係のあるものではないが併し分娩に尤も大なる關係のある小骨盤の廣狹はこの大骨盤の大小に準すべきものであるから其の大小を測ることを知らねばならぬ其の側は則ち左右腸骨の距離を其の楕と前上棘との二個所で測るのである而して平常の骨盤は左右前上棘の距離は大凡七寸二分位で左右腸骨楯の尤も距れた所ならば其の距離は大凡八寸二分位のものである

小骨盤は大骨に比べては甚だ深くして且つ後方に彎曲したところ圓形の四側腔で其の周圍は殆んど骨壁から成つてをるものである則ち薦骨、尾骨、坐骨、耻骨、腸骨体と而して坐骨薦骨靱帯を以て圍まれてあるから分娩するときの方つて尤も大なる關係のあるもので産科において通常骨盤と云ふのは則ちこの小骨盤のことである而してこの小骨盤は上口と内腔と下口との三部に分けられてある

上骨盤口は小骨盤の上口則ち大小骨盤の境界たるところで尤も緊要なる部である而して其の形ちは女子平常の骨盤の後方の薦骨胛の挺突が僅かであるから橢圓形をなしてをるとはいふもの、前方は耻骨縫際において稍や尖つて其の實葉状をなしてをる併しながら男子に於いては薦骨胛の突出が甚だしいから心臟状をなしてをる而してこの小骨盤の縦徑は薦骨胛の中央から耻骨縫際の上縁に至るまでの距離を測るものでこの間を眞結合線と名付けて其の長さは大凡三寸六分であるまた横徑は左右無名線の尤も距れた距離を測るべきもので其の長さは大凡三寸九分位であるまた斜徑は一方の薦腸縫際から他方の耻骨と腸骨の癒合点に至るまでの距離であつて四寸一分である而してこの斜徑には左右の別のあるもので右の斜徑は一に之れを第一斜徑と稱して右の薦腸縫際と左の耻骨腸骨癒合点との距離を云ふので左の斜徑は一に第二斜徑と稱して右の斜徑の反對の距離を云ふのである

骨盤腔は其の上口から下口に至るまでの内面を云ふのである其の廣さは上下一様でない則ち上の廣いところを骨盤濶と稱して下の狭いところを骨盤狹と稱する骨盤濶の縦徑は第二、第三の薦骨椎の癒合点から耻骨縫際の中央に至るまでの距離で其の長さは二寸七分余であるまた横徑といふのは縦徑の midpoint を横ぎつて左右の腓骨壁に至る所の距離のことで其の長さ三寸六分であるまた斜徑は其両端は軟部であるから固より一定はしてをらぬが併し通常縦徑の二倍よりも長いものである骨盤狹は骨盤管中の尤も狭い所て耻骨項と坐骨棘と薦骨の尖端とて圍まれてあるものである下骨盤は後方は尾骶骨の尖端左右側は薦骨坐骨靱帶、坐骨結節と其の上行枝前は耻骨と弓靱帶とより成つて居る而して其の四壁は前後左右に於いて大に長短の差異がある則ち前壁は側壁よりも短く側壁はまた後壁よりも短いものである小骨盤の前壁は其の上縁より下縁に至るまでの距離は僅かに一寸二分位であるが左右の側壁は腸骨の無名線から坐骨結節に至るまでは三寸位もあつて殆んど前壁の倍以上であるまた後壁は薦骨胛から尾骶骨の尖端まで四寸三分程で殆んど四倍位もするのである

骨盤の方向は頭部から足部へ直行する所の鉛直線を外れて前方に傾いて居る則ち直立

上骨盤口は小骨盤の上口則ち大小骨盤の境界たるところで尤も緊要なる部である而して其の形ちは女子平常の骨盤の後方の薦骨胛の挺突が僅かであるから橢圓形をなしてをるとはいふもの、前方は耻骨縫際において稍や尖つて其の實葉状をなしてをる併しながら男子に於いては薦骨胛の突出が甚だしいから心臟状をあしてをる而してこの小骨盤の縦徑は薦骨胛の中央から耻骨縫際の上縁に至るまでの距離を測るものでこの間を眞結合線と名付けて其の長さは大凡三寸六分であるまた横徑は左右無名線の尤も距れた距離を測るべきもので其の長さは大凡三寸九分位であるまた斜徑は一方の薦腸縫際から他方の耻骨と腸骨の癒合点に至るまでの距離であつて四寸一分である而してこの斜徑には左右の別のあるもので右の斜徑は一に之れを第一斜徑と稱して右の薦腸縫際と左の耻骨腸骨癒合点との距離を云ふので左の斜徑は一に第二斜徑と稱して右の斜徑の反對の距離を云ふのである

骨盤腔は其の上口から下口に至るまでの内面を云ふのである其の廣さは上下一様でない則ち上の廣いところを骨盤淵と稱して下の狭いところを骨盤狹と稱する骨盤淵の縦徑は第二、第三の薦骨椎の癒合点から耻骨縫際の中央に至るまでの距離で其の長さは二寸七分余であるまた横徑といふのは縦徑の中点を横ぎつて左右の髀臼壁に至る所の距離のことで其の長さ二寸六分であるまた斜徑は其両端は軟部であるから固より一定はしてをらぬが併し通常縦徑の二倍よりも長いものである骨盤狹は骨盤管中の尤も狭い所で耻骨頂と坐骨棘と薦骨の尖端とて圍まれてあるものである下骨盤は後のは尾骶骨の尖端左右側は薦骨坐骨韌帶、坐骨結節と其の上行枝前は耻弓と弓韌帶とより成つて居る而して其の四壁は前後左右に於いて大に長短の差異がある則ち前壁は側壁よりも短く側壁はまた後壁よりも短いものである小骨盤の前壁は其の上縁より下縁に至るまでの距離は僅かに一寸二分位であるが左右の側壁は腸骨の無名線から坐骨結節に至るまでは三寸位もあつて殆んど前壁の倍以上であるまた後壁は薦骨胛から尾骶骨の尖端まで四寸三分程で殆んど四倍位もするのである

骨盤の方向は頭部から足部へ直行する所の鉛直線を外れて前方に傾いて居る則ち直立

せる軀幹にあつては上骨盤口は前方に下骨盤口は後方に傾斜してまた骨盤の前壁は下方に後壁は上方に向つて居るものであるがこの傾きを骨盤傾斜と名付けられてゐる而して此傾斜は骨盤と軀幹との兩水平面の中心に鉛直線を引いて其の角度を測ると上骨盤には六十度下骨盤には十度の角度を呈するものである則ち薦骨は耻骨縫際よりも高く前壁は後壁よりも低いものである夫れだから胎兒が骨盤を通過する際には其の前方に向ふ部分よりも常に下方にあるのであるまた骨盤腔自らも上口より下口に直行せずして矢張り前方に彎曲して居るのである今上骨盤口と下骨盤口との中間に於て骨盤腔の四壁から其中心に向つて同一なる距離の相像線を引いて而して其の中心の線を下方に向けて延ばすと後方へ凸隆するところの線となつて上下両口の間頭までは僅かに後方に向つて下つたてこれから著しく前下方に向つて殆んど薦骨、尾骶骨の前凹面も一致すべき彎曲を呈するものであるこれが則ち管の方向で斯の線を骨盤軸とも導線とも稱するものである則ち胎兒の分娩にも産婆の手を骨盤内に進入するにも皆な此れ線の方向によらねばならぬのである

凡て骨盤の内外面は皆な軟部を以つて包まれてあるもので而して只上口の腹腔に連るところと下口の肛門、陰門、尿道口を以て外方に開くところを除くの外は其の骨壁に在るところの諸孔隙は皆な軟部を以て閉ぢられてあるものである

第三章 婦人の生殖器

生殖器は人類の蕃殖を掌るところの器關で婦人においては骨盤の内部と外部とに其の位置を占めて居るものである而して其の内部と外部とによつて之を外生殖器内生殖器の二部に區別せらるゝものである

外生殖器は則ち骨盤の外部にあつて乳房と耻部との二つから成り立つて居るものである

(一)乳房は前胸の左右側にあつて産後乳汁を製造するところの許多の孔腺を存して居る一對の半球形のものである而して其の中央に突起がある之れを乳嘴とも乳頭とも稱せられて乳暈を以て圍繞せられてある而して乳房の中央にある圓い斑点は則ち乳暈であるまた乳嘴には大凡十二の小さい孔があるこれは則ち乳腺の排泄口

で則ち乳汁を出すところである乳嘴は大に神経豊富で居るもので知覺が至つて鋭敏であるから之れを摩擦すると忽ち勃起するものである而して感覺の過敏ある妊婦の乳嘴を甚だしく刺戟すると爲めに墮胎することがあるのである

乳房は樹枝狀に分岐するところの細管から成り立てられてあるもので此の細管を輸乳管と名付ける而して其の外端は則ち小孔によつて乳嘴に開口して内端は膨大なる葡萄狀を爲して居る乳腺は則ち之れである

(二)耻部は下骨盤の前側に在るもので一名外陰部とも稱する則ち陰阜、大陰唇、會陰、小陰唇、挺孔、尿道口、處女膜を具へて居る腔口等より成り立てられてある

(イ)陰阜は耻骨縫際の前側にあつて許多の皮下脂肪によつて半球形に膨隆して小丘狀をなして居る而して春氣發動期になると毛が生ゆるもので其の後方は分れて左右の大陰唇に移つて居るものである

(ロ)大陰唇は一名外陰唇とも稱して其の質は大に延長すべき皮膚の廣い皺襞で陰門の左右に相對して居る處女においては左右互に密接して居るが婦女においては稍や弛やかで隔離すること甚だしい其の外表面は褐色を帯びて春氣發動期になると毛が生ゆる内表面は平滑で潤ひがある後端は軟かなる陰唇繫帶によつて左右相連續して居る而して前端は陰阜に移つて居るものである

(ハ)會陰は陰肛二門の間隔で甚だ延長し得べき性質を具へてをる而して其の皮膚の下に數層の筋肉がある

(ニ)小陰唇は一名内陰部と稱して大陰唇の内側にある皮膚の皺襞である處女においては常に大陰唇から掩はれてをるものであるが婦女に於いては手淫、房事のために大抵は外方へ隆出してをるものである其の形は大陰唇より小さく且つ薄い而して前端は内外二葉の小皺襞に分れてをる其の外方のものは挺孔の包皮を作つて内方のものは挺孔繫帶を作つてをる

(ホ)挺孔は小陰唇上端の二葉の皺襞の間に在る小隆起物である至つて知覺の鋭敏なるものであるから之れに觸るれば忽ち勃起するものである

(一)尿道口は挺孔の後方四五分のところにあるもので厚い環状の縁を具へられてあるから指頭を以て容易に其の所在を知ることが出来るものである

(二)腔口は尿道口の少し後方よある裂口で則ち腔の入口である處女においては輪狀若くは半月状の粘膜の皺襞を以て其の大半を閉ざされてある此の粘膜は處女膜と名付けられるもので通常最初の交接によつて三四の小片に破綻するものであるが併し他の原因によつてもまた破るゝことがあるものであるから單に此の膜の欠損のみを以て其の破瓜と否とを判断することが出来ぬものである

内生殖器は則ち骨盤内にあるもので腔、子宮、輸卵管、卵巢の四部から成り立つてあるものである

(一)腔は其質は延長すべき膜様管状の腔洞である腔口から始まつて骨盤導線の方面に沿つて前方に彎曲して尿道と直腸との間を上行して子宮に達してをる其の深さ凡三寸五分である而して其入口は狭いが上部に至て漸く廣くなつてをる其最上の廣い所を穹窿と名付ける其の中央にば子宮の下端が嵌り入せられてあるか

ら此の穹窿を前後左右の四部に區別する腔壁の内面に粘膜であつて處女は前後の兩壁に多くの横襞があつて縮張自在であるが婦女においては房事、分娩のために其の横襞が弛緩して腔洞が全く濶大平滑となるものである

(二)子宮は骨盤内にあつて膀胱と直腸とに其の前後を擁せられてをるところの一個の硬い肉質器である其形ちは茶先を倒にしたやうでまた少し扁平である長さは大凡二寸六分許りもあつて其の上部は大きく下部は小さい前面は平坦で後面は少し凸隆してをる上部の尤も廣い所は子宮底で其の巾は大凡一寸六分もある下部の小さい圓柱形の所を子宮頸と稱する頸と底との中間を子宮体と稱する体内には子宮腔があつて頸の内には頸管がある底と体は腹膜を以て被はれてをる而して兩側に廣韌帯があつて前側に圓韌帯がある此の圓韌帯は子宮の位置を維持してをるものである

子宮頸の下半分は栓状をなして腔の穹窿部へ挺出してをる之れを子宮腔部と稱する處女の子宮腔部は稍や扁平で滑らかである其の下端に子宮外口と稱して横に裂

けたやうな孔がある此の孔を單に子宮孔とも稱するまた外孔の前後に前唇、後唇の兩層がある前唇は後唇よりも長く且つ厚いが併し己に一度分娩したところの婦人においては子宮の腔部の滑かでなくして且つ多少肥大してをる而して唇の痕跡のため凸凹不平となつてをるから外口の形状もまた自然不正である

子宮体の内に子宮腔と稱する三角形の一腔があつて其の基底は子宮底に向つてをる其の左右の兩隅に輸卵管口と稱して輸卵管に通じてをるところの小さい孔がある下隅は体と頸との界にあるこれを子宮内口と稱する則ち頸管に通じてをる頸管は頸の内部にあるところの一條の管で其の中央は廣いが上下の兩端は狭い此の上下兩端の狭いところは則ち内口と外口とである子宮腔と子宮頸の裏面は粘膜を以て包まれてあるが健全なる子宮口においては其の製出せるところの粘膜の量は至つて少ないもので只腔管を滋潤するに過ぎぬものであるから子宮腔の前後の兩壁は常に相膚接して居るものであるまた月經時においては子宮腔の粘膜が腫脹充血して腔内に血液を漏らすものである月經は則ちこの血液の体外へ排泄せらるゝものである

のである

廣韌帯は元來腹膜の廣い皺襞であるが之れが子宮の左右に於いて其の兩側に附着して緩やかに子宮を骨盤腔の中央に維持するのである則ち前腹壁の内面を被ふところの腹膜は下方に延びて骨盤の前壁と膀胱とを被ふて膀胱の後壁から轉じて子宮の前面へ移つて而して其底部を越えて後面において腔の後壁の上部まで下つて更に其の方向を變じて直腸から骨盤後壁まで上行して此の部を被ふてをる子宮の前後兩面を被ふところの腹膜は子宮の兩側において相密着して廣い皺襞をなしてをるこの廣い皺襞は則ち廣韌帯であるこの廣韌帯は前後の二葉から成り立つてをるもので輸卵管は其の前葉に包まれてあつて卵巢は後葉に包まれてあるものである

圓韌帯は其の名の如く圓い肉質の線條から成り立てられてあつて左右の一對あるものである此の圓韌帯は子宮底部の兩側から起つて斜に前外方に走つて腹壁を穿ちて陰阜内に止るものである

子宮は右の二靱帯に擁せられてある外に尙ほ其頸部において腔の穹隆部と膀胱に附着して其の位置を維持して居るものである

(三)輸卵管は一名喇叭管と稱して子宮底の兩側から起つて廣靱帶の上縁に沿ふて外方に走るところの左右一對の膜様管である其の大きさは箸程で長さは殆んど三寸許りもある其の内端は輸卵管を以て子宮腔に通じて外端は腹腔に開口して居る

喇叭管則ち輸卵管の裏面は粘膜を以て被はれてあつて管の廣さは部位によつて一様でないが其子宮腔に開くところは尤も狭く中央部は尤も廣い而して外端則ち腹腔の開口部は喇叭狀に擴かつて其の末端は剪彩狀をなして居る喇叭管の剪彩と稱するのは則ち此處である而して此の喇叭管は男子の精液を卵子に向つて運んだりまた卵子を子宮内へ送るところの用をなすものである

(四)卵巢もまた一對の器關であつて輸卵管の稍や後下方に方る子宮の兩側に在つて廣靱帶の後葉に包まれてあるものである其の形ちも大きさも恰ど扁桃のやうで内には無数の小胞を有して居る之れを「グラッフ」氏の胞子と名付けられて則ち卵子の

舎とるところである

卵巢内に包まれてあるところの小胞は其の大きさは至つて不同で小さいものは到底肉眼を以て見ることが出来ぬ程であるが其の大なるものは殆んど豌豆程もあるものである而して胞内には各一個の卵子を含むで居るものであるが稀に二個を含むで居るものもある而してこの小胞は熟するに隨つて膨大し膨大するに隨つて益々其の周壁が薄くなつて遂に破裂して其の含むで居るところの卵子を腹腔へ出すものである小胞が膨大して後破裂して卵子を腹腔へ出すところの此の機能を名付けて卵排機と稱する而して其の腹腔へ出たところの卵子は「ケシノミ」よりも尙ほ小さいもので夫れが腹腔から剪彩に受けられて輸卵管を通過して子宮へ來るものである婦人の孕むのは卵子が此の通路に於いて男子の精液に會ふて胚胎するからであるこの通路において卵子が胚胎すると漸々發育するものであるが若し胚胎せぬときは直ちに其の生活力を失ふものである

排卵機は月經と其の始終を共にするので生殖器の成熟した時期即ち春氣發動期か

ら始まつて生殖器の衰頽した時期に終るものである通常の女子は十四五歳から始まつて四十七八歳に終るもので其の間は平均三十五年であるが併し往々十一二歳から始まつて五十歳以上にまつても尙や其の機能を失はぬものがあるものがあるものであるまた月経は他に病氣があれば兎も角妊娠と授乳時を除くの外は此の間に閉止することないものである而して月経中は多少身体の疲勞を覺わたり或は腰痛を發することがある

月経日數の長短と經の多少とは至つて不同のものであるが通常毎四週間目に起つて四五日間を終るものである若し時日の久しきに亘つたり或は非常に多量の經が下りたり黒色の血塊を洩しよりまた全く月経の閉止したりするのは生殖器に異状のある徴候であるから直ちに醫治を受けねばならぬものである

月経中は神經が至つて鋭敏になつて居るもので殊に生殖器病に罹り易いものであるから勉めて精神の激動と感冒と房事とを避けねばならぬ

骨盤内には生殖器の外に尙ほ膀胱、尿道、直腸と稱する器關があつて皆な産婆の

職務に大なる關係を有つて居るものであるから産婆たるものは宜しく其の大概を心得て居らねばならぬ

(一)膀胱は直ぐ耻骨縫際の後方にある三口を具へられてあるところの膜様の囊である虚空ある時分は小骨盤内に潜むで居るものであるが尿の滿ちた時分には小腹部まで顯出するものである其の後下方は左右の輸尿管から尿を受けるところの二つの口があつて前下方は漏斗のやうに狭くなつて尿道と移つて居る

(二)尿道は小管程の大きさの膜様管で膀胱から起つて耻骨縫際の後方を通つて膈の前壁に附着して少し前方へ彎曲して陰門に開口して居るもので膈口の前方にあるところの尿道口は即ちこれである

(三)直腸は子宮と膈との後方とあつて骨盤の後壁に沿ふて前方に彎曲して肛門に開口して居るものである

第二編 平常妊娠論

第一章 妊娠の概略

ら始まつて生殖器の衰頽した時期に終るものである通常の女子は十四五歳から始まつて四十七八歳に終るもので其の間は平均三十五年であるが併し往々十一二歳から始まつて五十歳以上にまつても尙や其の機能を失はぬものがあるものであるまた月経は他に病氣があれば兎も角妊娠と授乳時を除くの外は此の間に閉止することないものである而して月経中は多少身体の疲勞を覺わたり或は腰痛を發することがある

月経日數の長短と經の多少とは至つて不同のものであるが通常毎四週間目に起つて四五日間を終るものである若し時日の久しきに亙つたり或は非常に多量の經が下りたり黒色の血塊を洩しよりまた全く月経の閉止したりするのは生殖器に異状のある徵候であるから直ちに醫治を受けねばならぬものである

月経中は神經が至つて鋭敏になつて居るもので殊に生殖器病に罹り易いものであるから勉めて精神の激動と感冒と房事とを避けねばならぬ

骨盤内には生殖器の外に尙ほ膀胱、尿道、直腸と稱する器關があつて皆な産婆の

職務に大なる關係を有つて居るものであるから産婆たるものは宜しく其の大概を心得て居らねばならぬ

(一)膀胱は直ぐ耻骨縫際の後方にある三口を具へられてあるところの膜様の囊である虚空ある時分は小骨盤内に潜むで居るものであるが尿の満ちた時分には小腹部まで顯出するものである其の後下方は左右の輸尿管から尿を受けるところの二つの口があつて前下方は漏斗のやうに狭くなつて尿道に移つて居る

(二)尿道は小管程の大きさの膜様管で膀胱から起つて耻骨縫際の後方を通つて脛の前壁に附着して少し前方へ彎曲して陰門に開口して居るもので脛口の前方にあるところの尿道口は即ちこれである

(三)直腸は子宮と脛との後方にあつて骨盤の後壁に沿ふて前方に彎曲して肛門に開口して居るものである

第二編 平常妊娠論

第一章 妊娠の概略

妊娠と云ふは卵子が胚胎して母の体内に宿つて居る間のことで則ち受胎に始まつて分娩期を終るものである而して此の妊娠の間は平均四十週間則ち二百八十日であるが便利のため之れを十期に分けて毎四週則ち二十八日を以て一期とし之れを妊娠の一ヶ月と定めてある然るに我が國に於いては古來舊曆の一ヶ月を以て妊娠の一ヶ月として其の十ヶ月を以て妊娠の全経過とするものがあるが之れは抑も誤解の甚だしいものである何故かと云ふに大陰曆の一ヶ月は則ち二十九日乃至三十日であるから其の十ヶ月は則ち二百九十五日で妊娠の平均數より多いこと殆んど十五日間である

胚胎と云ふのは交接によつて婦人の生殖器内へ入つたところの男子の精虫が卵巢より出たところの卵子と抱合して遂に一体となることであつて卵子と精虫が斯く合体すると婦人は則ち受胎するので此の受胎したところの婦人を妊婦と稱するのである而して卵の胚胎するところは通常喇叭管か若しくは卵巢の近傍に於いてするもので子宮内に於いてすることは至つて稀である併し其の胚胎の何れの場所でするにもせよ卵は必ず子宮内に於いて發育するものである

月経後數日の間は卵巢に於て成熟したとあるの卵子と卵巢を出て未だ途中に遊離して居るから此の時期に尤も受胎し易いものである而して月経後三四週の後に交接して受胎することのあるのは男子の精虫が婦人の生殖器の一部に留まつて次回の月経と共に遊離して來るところの卵子と抱合するからである

平常の妊娠と云ふのは即ち子宮へ宿つたところの卵子の發育にも其の母体にも少しも障害のないことを云ふのである

子宮内に宿るところの卵の一個であるときは之れを單胎と稱するが二個以上の時は之れを複胎と稱する而して其の二個であるときは孖胎又ハ雙胎三個であるときは品胎四個であるときは要胎と稱するものである五個以上は未だ曾て例のないことであるから隨て其の名もあひのである

妊娠の平常と異常とは決して其の單胎と複胎とに關せぬもので兎も角胎兒及び其の附屬物たる卵膜、胎盤等の發育に障害がなくまた妊婦の精神と身体の健康に異變のないときは之れを平常の妊娠と稱すべきものである併し複胎の多くは難産其の他の異常を

起こし易いものであるから本篇には複胎を異常妊娠論中に於いて説明することゝしたのである

第二章 母体に於ける妊娠中の變化

母体には妊娠中卵子を養ふに適すべき丈けの變化と月が満ると分娩し得べき丈けの變化とを起すのは勿論のおとであるが今之れを全身の變化と生殖器の變化との二つに區別して説明する

全身の變化

婦人が孕むだときには全身に如何な變化を起すかと云ふにおもに精神、神經、消化器、血行器、泌尿器、皮膚等において其の作用の常を失ふことである例合は平常愉快なる性質の人も精神が鬱々として或は泣き悲しむとか或は怒り罵しるとかまた平常よりは快活になるとか其の他齒痛、頭痛、腰痛、眩暈、鼻血、寒熱往來、心悸亢進、悪心、嘔吐、流涎、便秘などを起したりまた平素好むだところの食物を嫌つて反つて慣れぬものを好むだり時としては壁土、線香、木炭のやう

明治卅二年四月十日印刷
明治卅二年四月十三日發行

(禁賣品)

編輯者兼
發行者

下山千丈

東京市本郷區向岡
彌生町三番地

印刷者

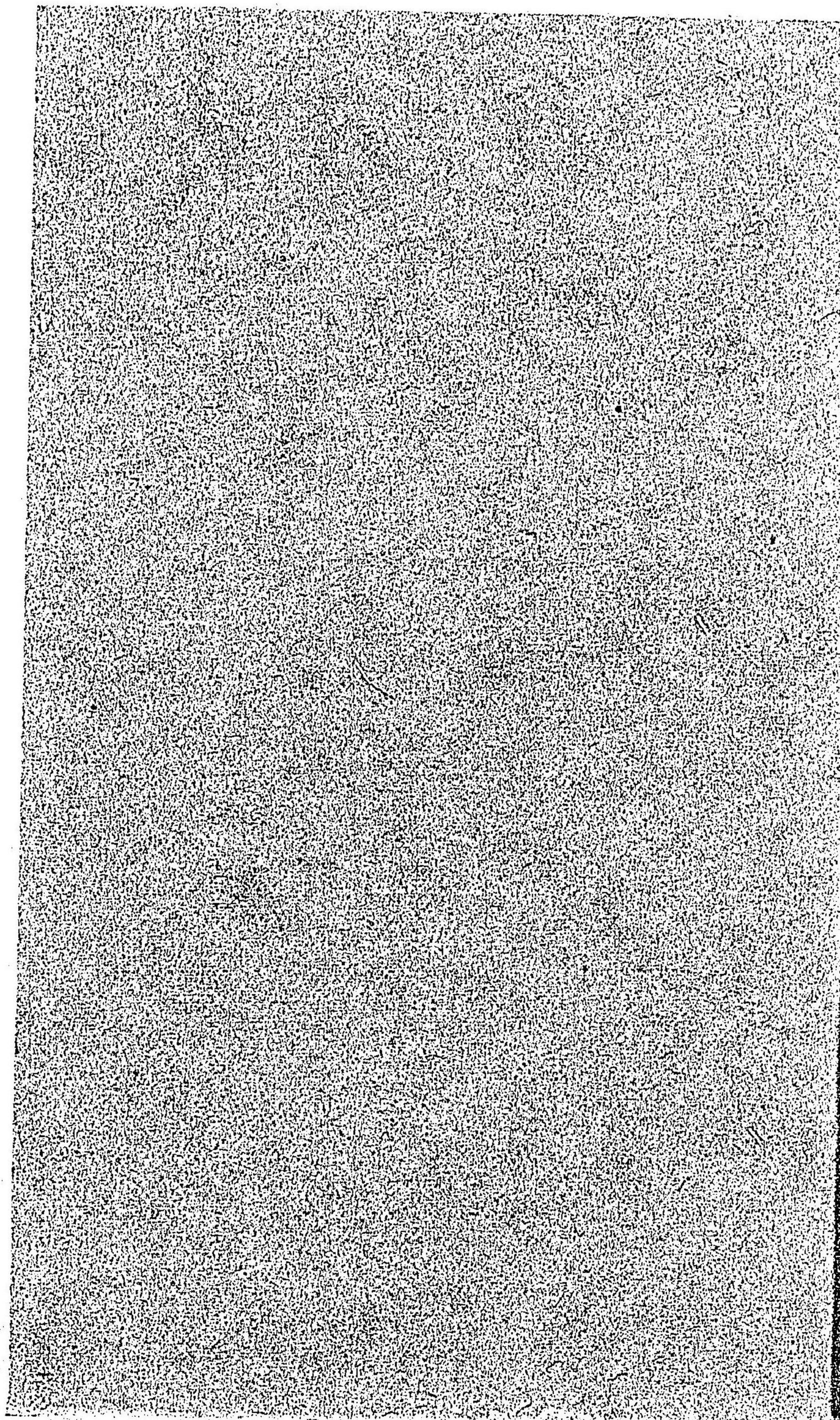
笹川亮太郎

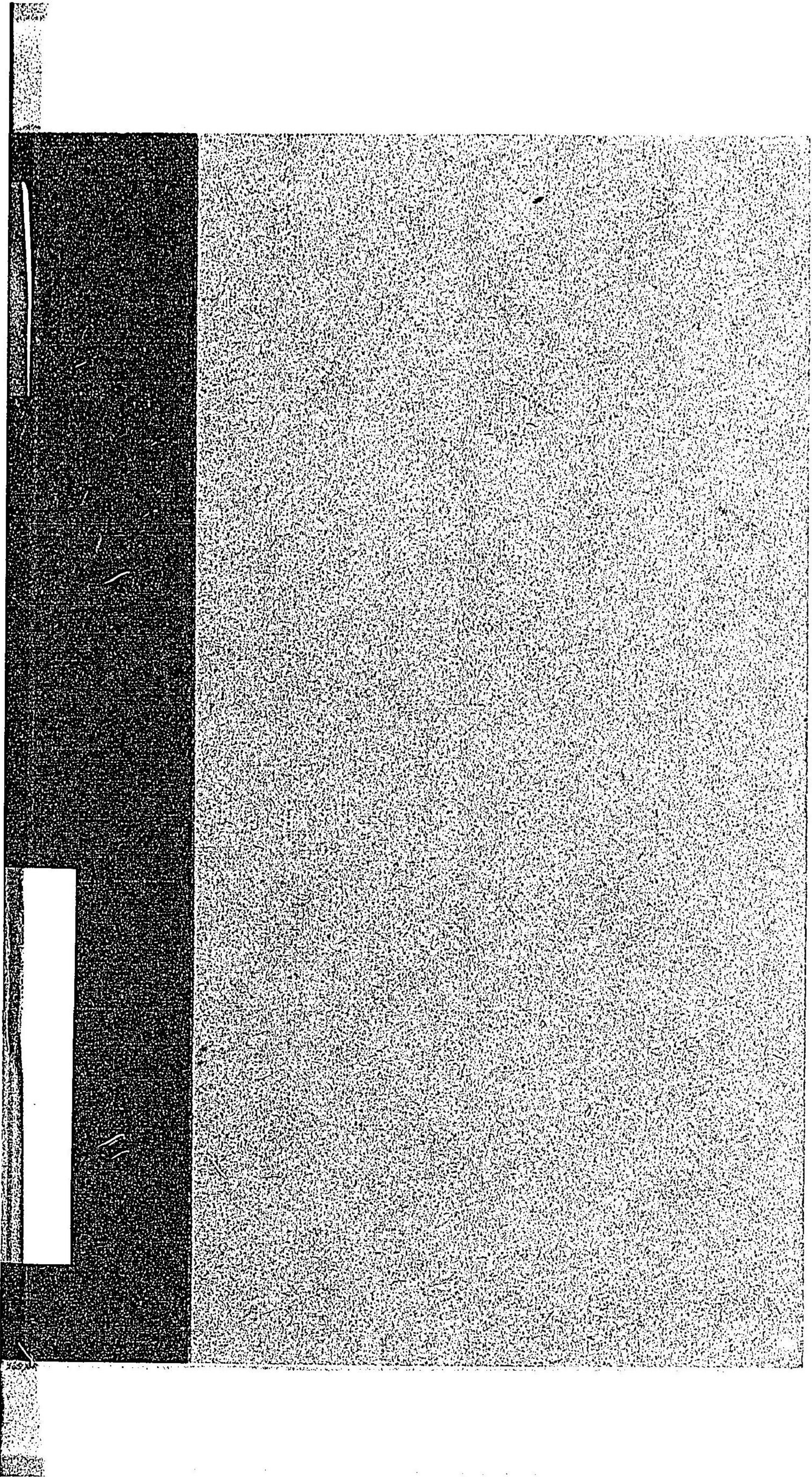
東京市本郷區向岡
彌生町三番地

印刷所

東京修士館

東京市本郷區向岡
彌生町三番地





特52

11

産婆全科

国立国会図書館

203898-000-5

特52-11

産婆全科 第1回

阪東 直次/述

M32

EDW-0132



